T2R2 東京工業大学リサーチリポジトリ
Tokyo Tech Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	高等教育における学習経験レベルを考慮した知覚品質評価に関する研究
Title(English)	Research of perceived service quality evaluation using the learning experience level in higher education
著者(和文)	川本弥希
Author(English)	Hisaki Kawamoto
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10905号, 授与年月日:2018年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:日髙 一義,比嘉 邦彦,西條 美紀,室田 真男,辻本 将晴,渡邉 雄貴
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10905号, Conferred date:2018/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

Powered by T2R2 (Tokyo Institute Research Repository)

（博士課程）

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第　　号		学位申請者氏名	川本弥希	
論文審査 審 査 員		氏　名	職　名	氏　名	職　名
	主査	日髙一義	教授	辻本将晴	准教授
	審査員	比嘉邦彦	教授	渡辺雄貴	准教授
		西條美紀	教授		
		室田真男	教授		

論文審査の要旨（2000 字程度）

本研究は，「高等教育における学習経験レベルを考慮した知覚品質評価に関する研究」と題し、学習への関与を形成する概念を体系化し，その学習関与レベルが学習者の講義に対する満足度や将来の学習行動意図に与える影響を検証したものであり，次の５章からなる．

第１章「序論」では，本研究における問題意識と，それを解決するための研究課題が記述されている．本研究の問題意識は，教育における学習意欲や態度の改善などの学力面以外での学習成果が，教育サービスの知覚品質の評価モデルに，影響要因の一つとして考慮されていないことである．そこで，本研究では（１）学生の学習関与状態が，学習成果として，知覚品質評価に与える影響について十分な議論が行われていない，（２）学生の学習関与状態の形成に影響を与える要因の体系的な枠組みが，十分に検証されていない，の２点を課題とした．

第２章「本研究と関連する先行研究」では，学習の関与状態及び教育サービスの知覚品質評価に関する研究動向を把握するため先行研究の調査が記述されている．近年では，教育においても学習関与（エンゲージメント）の研究が注目を浴びており，このエンゲージメントの概念を本研究でも踏襲した．また，教育サービスの評価は，知覚品質の概念化や測定モデルの開発が進んでいるものの，教育サービスは複雑で評価が難しく，サービス品質をより正確に測定するためには，いまだ研究の余地が残されていることを示した．

第３章「学習経験レベルが学習者の満足度要因と行動意図に与える影響」では，課題１と対応し，研究ⅠとⅡの記述で構成されている．研究Ⅰでは，学習経験レベルの学習成果満足度，行動意図への直接的な影響を定量的に検証することを目的とし，サービス研究における知覚品質のモデルを適用し，既存の評価モデルに学習経験レベルを追加し，その有効性を検証した．その結果，学習経験レベルを追加した方が，モデルの適合度はより高くなる傾向が分かった．研究Ⅱでは，学習経験レベルを学習成果として考慮し，学習成果満足度，行動意図との関連性を検証して，新しい評価モデルを作成することを目的とし，学習経験レベルを追加した仮説モデルを作成し，そのモデルの妥当性，信頼性をパス分析により検証した．その結果，学習経験レベルから，学習成果満足度，行動意図への直接的，間接的な影響があることが確認された．

第４章「学習者の学習経験レベルの変化に影響を与える要因」では，課題２と対応し，研究ⅢとⅣの記述で構成されている．研究Ⅲでは，学習関与状態の形成概念の体系化に関して学生から収集した定性データからテキスト分析によりカテゴリーを抽出し，概念の体系化を行なった．その結果，学習経験レベルの変化には，個人要因として，学習意図，存在感，開放性，信頼感，環境要因として，講義の明瞭性，学習内容の汎用性の影響が確認された．研究Ⅳでは，学習経験レベルの定量的な尺度が開発されていない課題に対して，既存の教育心理尺度を用いて，学習経験レベルとの関係を定量データから関係性を検証した．その結果，学習経験レベルを変化させる重要な要因として，学習に対する興味や関心，価値の認識，自身の存在感の認識が，学習経験レベルを高めることを明らかにした．

第５章「結論」では，本研究で得られた知見を概観し，成果をまとめたうえで，今後の課題が記述されている．本研究の成果として，学生の講義に関与する状態の改善は，学力などの学習成果に影響を与えるだけではなく，その講義に対する満足感，将来の行動意図にも，直接的な影響を与えること

が分かった．また，本研究の課題として，調査結果の一般化には異なる学生や講義タイプにおける実証研究や，経時的な更なる調査を行うことなどを述べた．

教育学やサービスの評価研究において，今まで十分に検証されてこなかった，学生の学習経験と満足度要因との関連性を明らかにし，新しい教育サービス評価の概念モデルを作成した．学術論文としての研究の新規性ならびに実学としてのイノベーション科学への貢献が確認できることから，本論文を博士（学術）の学位論文として十分な価値を有するものと認める．

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ（T2R2）にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。